

資料委員会 便り

ARCHIVES NEWS

第 6 号

(2019年 6月)

保存資料の整理作業は続けられています。毎週水曜日、数名の資料委員が参加しての資料の分別、保存袋へ封入、目録記入、画像取込み等、こうした作業は当分続きます。



昭和3年から15年にかけて記録された「川越基督教会 財産目録」がありますがその後の記録が未記入になってます。宣教140周年にあたる昨年、この続きを調べることになりました。乾寿夫兄がこの労をとっていただき、1年間をかけて、調べていただきました。その様子を書いていただきました。

資料委員の玉木純子姉は「山邊久吉師の日記」を解読しています。山邊師は1887(明治20)年～1888年に川越基督教会で伝道師をしていました。この日記の所蔵者は資料委員の本間始さんで、山邊師は父方の祖父にあたり、ウィリアムズ主教の信頼厚く、晩年は関西方面で活躍されました。人生半ばにロンドンで海員宣教に従事、日記はそのロンドン～横浜間の旅の1ヶ月間の記録です。当時の船旅の様子や英国文明や通りすがりの聖地に対する思いがたづらられています。A4版の半分程、赤い布張りの表紙でルートの地図や案内も掲載されています。本間兄とご親族の方々が大切に受け継いで来られた資料です。資料委員会ではこのような元々教会で所蔵していたのではない資料も取扱わせていただいています。また山邊師の妻キサ夫人は長崎の蘭医で嬉野鼎甫(うれしのていじゅ)氏の娘、嬉野氏はウィリアムズ主教の日本語教師。2人を撮影したガラス乾板は現在立教学院資料センターに保管されています。

教会創立者の田井正一師は川越着任早々、私立女学校を創立されました。この学校も10余年の短い事業でしたが、創立期から廃校までに公立学校との間に教師、生徒の交流があったようです。県立川越女子高校の野口孝教諭は永年、川女の歴史をお調べになっており、今回聖公会の私立女学校との関係を集めた「川女歴史探報」が発行されました。お読みください。

川越基督教会財産目録は 教会の歴史がかいま見える

パウロ 乾 寿夫

教会保管の古文書のなかに「財産目録 川越基督教会・川越初雁幼稚園(昭和3年現在)」と言う資料がある。これは恐らく筆跡からして、昭和15年頃に奥村亮司祭と山本藤輔氏(山本喜一さん、若宮光子さんのご尊父)が書き上げたものではないかと思われる。財産目録とあり、教会と初雁幼稚園の土地・建物の坪数、取得年月、価額、取得経過が事細かに書かれている。そして聖堂什器備品の十字架、説教壇、オルガン、燭台、フロンタル、チャリス・パテンの類まで記載されている。さらにまた、明治時代の川越宣教開始当時の説教講演会の年月日、説教者、聴衆者人数、開会のいきさつ等々、詳細に記録されている。この資料一冊で、まさに明治大正から昭和15年頃までの教会と初雁幼稚園の歴史を見ることが出来る。

ところがさて、戦後の昭和20年以降は教会財産の取得品目や取得年月、その財産が寄贈なのか購入なのか、寄贈ならばどなたからから頂いたものなのか、記録が全くと云っていないほどない。「教会が保管している什器備品、信徒から寄贈奉献された財産を記録した財産目録を作成しておくべきではないか」との教会資料保管委員長の山本元さんの要望もあり、調査を始めてみた。調査は受聖餐者(堅信受領者)総会議案・報告書、教会会計帳簿、領収書、教会委員会記録、月報(蔦の教会)を対象にした。近年は記録もしっかりと記載され、関係者の記憶もハッキリしていて、かなり正確に判明したが、昭和20年代~40年代(1945~74年)は記録がないか、あっても詳細が分からない。確実に判明したものだけを記載することとした。

このたび作成した教会財産目録に、ぜひ目を通して一読していただきたい。教会財政はすべて献金で支えられているのは勿論ですが、教会財産はいかに信徒の篤い思いが込められているかが感じられる。そのときそのときの教会が望んでいることに、信徒が喜んで寄贈奉献に応じ、神様の恵みに感謝して捧げる。その思いを感じ取ることが出来る。

この目録は調査不足でかなりの欠落があると思う。また記載があっても誤りがあると思う。その節は指摘して頂き、訂正したい。

聖公会川越キリスト教会の 人びととその活動



1907年撮影の宣教師と川越教会の人びと。後列右から二人目が司祭にして川越女学校校長の田井正一。その左が駒野義夫。前列右端がミス・ランソン。一人おいて白いブラウスの女性がミス・ヘーウッド。

聖公会川越キリスト教会の宣教師の中に、町立川越高等女学校で講師を務めたと考えられる女性宣教師の活動を通じて、明治時代の日本社会で果たしたキリスト教の役割の一端を紹介したい。

町立川越高等女学校 宣教師の名

女性宣教師の名前はミス・ヘーウッド。川女の『同窓会名簿』の旧職員欄の町立時代の職員一人として記され、その脇には「聖公会」とある。在職期間は空欄だが、ミス・ヘーウッドはこの教会の女性宣教師だった。

川越での聖公会の活動は、一面に記したように、田井正一司祭によって本格的に始まる。キリスト教布教が認められていたとはいえず、日本国内の多くの地域では、キリスト教への警戒感はまだまだ強かった。川越もそのような地域の一つで、布教から9年後の87年には、最初に洗札者名が現れた。89年の川越で

旧職員

氏名	教科	在職年
中井尚珍	高等小義務	明39. 4~1
菅野政五郎	高等小義務	明39. 6~
山取秋夫	小原流作法	明39. 6~
星野正義	校医	明39. 6~
田中ヘーウッド	聖公会	明39. 5~1
廣瀬彌吉	町立校長	明40. 4~1
倉田村史		明42. 3~
河村仁兵衛		明42. 4~
久田根		明42. 4~
岡小千		明42. 4~

川女の『同窓会名簿』に記された町立時代の旧職員

たのか、確かな証拠はないが、一九〇六年から川越にいたわづかの期間、何らかの形で英語教育にあたっていたのではないだろうか。写真で見ると、日本女性よ

りも大柄で細面である。肌も腫の色も違う。洋装のアメリカ人女性から間近に英語の教授を受けた当時の生徒は、どんな思いで授業を受けていたのだろうか。

さらにはヘーウッド、ランソンは、一九〇五年から自宅で日曜日の午後、子どもを対象とした「日曜学校」というものを開いた。キリストにまつわる物語を聞かせ、絵、カード、そして聖歌を通じてキリスト教について教えるのである。クリスマス会も行われた。最初は19名で始まった日曜学校も、やがて毎回の参加者平均は40名にもなり、一九

一九〇八年にヘーウッド、ランソンは川越を去ることになる。ヘーウッドは東京の立教女学院の副校長に、ランソンは仙台の伝道女学館の校長として赴任するためである。この時二人の送別会が、教会と川越町

まず彼女たちがやってきた一九〇四年、日本はロシアとの戦争中だった。そのころもあって、住民からはロシア人スパイという疑いの目で見られていたのではないかと感じたという。教会での講話には関心をもちて来たり、聖書を熱心に読む者もいたが、いざ洗札となると親や夫の反対でできなかったという者が多かった。一方

で住民の家を訪問すると、既婚女性の警戒心の強さも感じた。そこで直接の布教ではない方法で住民の中に入っていった。その一つが婦人対象の編み物教室

クリスマス会に二百人。室である。毎週好評のうちに行列、彼女たちは信者ではないが、編み物教室の終わりにみんなで聖歌を歌った。また中学生対象の英語教室も開いた。これが先に記した英語研究会のことであろう。「中学生」だから、川越中学校の生徒も多数いたであろう。右の写真は袴に学生帽をかぶっている者もいるので、中学生を写したものである。川越の中学生について記した文に「上級の男子はイートンにある学校の制服のような衣服を着ている。下級生は短いスカートが半分に分かれたような着物を着ている」とあるから、ここに写っているのは中学一、二年生であろう。

クリスマス会や日曜学校の内容は宗教活動そのものだが、日曜学校には親も内緒で参加していた子ども達も、クリスマス会後には親も了解したという。

ヘーウッドの川越での活動については、米国聖公会機関誌だった「The Spirit of Missions」に、ヘーウッド自身が記した文章がある。そこには川越での布教の困難と共に、珍しく感じたこと、次第に信者を増やして行く様子なども記されている。

〇七年には登録者数が90名となった。さらに南大塚の教会では月曜学校、入間川で火曜学校を開いた。

一九〇六年12月のクリスマス会には公に知らせたこともあり、二百人の子どもたちが集まった。教会では収容できない数なので、大きなホールを借りたという。「主われを愛す」という聖歌が始まり、田井司祭による祈り、主の祈りが子どもたちと共に唱えられ、歌、お話、聖書の言葉の交流、聖歌があり、ケーキを食べ、最後にプレゼントが配られた。子ども達は大喜びだった。クリスマス会や日曜学校の内容は宗教活動そのものだが、日曜学校には親も内緒で参加していた子ども達も、クリスマス会後には親も了解したという。

の有志共催で、川越会館(旧川越市民会館の前身)で行われた。当日の出席者は約百名。町助役の開会挨拶で始まり、教会関係者の他に代議士綾部惣兵衛も送別の辞を送った。二人の活動が布教を超えて、地域に浸透していたことが伺われる。

1906年撮影。中学生と思われる子どもたち。(米国聖公会「The Spirit of Missions」より)

川女の目の前にはある教会はカトリック教会である。カトリックの方でも川越での布教は難しく、最初の洗札者は一八九二年。八王子を拠点とした神父が一九一二年に六軒町の現在地に土地を取得して建てた家屋を聖堂兼伝道館とした。一九三三年に現在の十字架鐘楼付き聖堂が完成した。

後任者
二人の後任には、アプタ

洪水被害の救済に活躍
二人の後任には、アプタ

川越に限らず、明治期日本の教育や救済事業の中でキリスト教徒の果たした役割は大きい。